

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 村尾誠一 印

学位申請者 陳 璐

論 文 名 厭世詩家としての北村透谷

○結論及び審査の経過

陳璐氏より提出された博士学位請求論文「厭世詩家としての北村透谷」について、論文審査と最終口述試験の結果、審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究論文であるとの結論に達した。

同論文に対しては、陳氏が博士後期課程在学中に指導委員会を構成していた柴田勝二（主任指導）、村尾誠一、友常勉の3名が事前審査を行い、多少の修正を施した後に学位請求論文を提出し、審査へ進むことが妥当であるとの結論を得た。論文提出後、学内から論文内容と重なる日本思想史の研究者である米谷匡史、学外から中国古典文学の専門家である川島郁夫本学名誉教授を加え、村尾誠一を主査として5名により審査委員会が構成され、2021年2月19日にZoomを用いたオンライン形式での公開審査が行われた。

○論文の概要

本論文は明治中期の詩人・思想家である北村透谷を「厭世詩家」という観点から論じたものである。構成としては第一部「厭世思想と明治」と第二部「透谷と東洋的前近代」の二部から成り、前者は「序章 「ロマン主義」のための透谷論」「第一章 明治初期における「ロマン主義」の転型——日清戦争を区切りにして」「第二章 厭世と生命」「第三章 厭世家の歴史観——明治という未完の歴史」「第四章 厭世から超俗へ——透谷による文学と社会」によって、後者は「第五章 北村透谷と宗教——閲ぎ合う陽明学・武士精神とキリスト教」「第六章 北村透谷と江戸文化——「粹」と「侠」をめぐる両義的評価」「第七章 透谷と東洋的なもの——東洋的構図の変奏」「第八章 耳の近代化——東洋の伝統的楽器が表象する思考原理」によって構成されている。

本論文における陳氏の主眼は、従来ロマン主義の詩人・思想家とみられがちであった透谷を「厭世」という概念によって捉え直すことにある。第一部の各章では、ロマン主義と透谷を特徴づける厭世の眼差しとの関わりを軸に議論が展開される。明治期の日本のロマン主義は『文学界』から『明星』へと展開する流れによって担われていくが、前者の中心的同人として活動した透谷を、ロマン主義の表現者の一人として眺める視点が現在まで持続している。陳氏によれば、透谷のロマン主義者としての立脚点は「他界」にあり、他界との交歓によって人間の内部生命を励起させることが透谷の企図したものであるとされる。その点で同じく内部生命への志向を持ちながら、本能的欲求に従った「美的生活」を

送ることを善しとした高山樗牛と差別化される。またこの内部生命を透谷は個人の次元にとどまらず「国民」という集合的な次元において捉えようとしており、「国民の生命」の活性化を透谷は希求していたとされる。

こうした他界への眼差しは当然現世的な現実世界を強く相対化することになり、それがおのずと透谷の思考に厭世的な彩りをもたらすことになる。もちろん厭世的な姿勢を持った文学者は古くから存在し、古典文学においても隠遁者の系譜が存在するが、陳氏は透谷の厭世をむしろ現実世界を批判する視座として積極的に評価しようとしている。この厭世的な眼差しによって現実世界と関わるという逆説が本論の一つの焦点となっており、それを成り立たせる要件として、自由民権運動の闘士であった透谷の前歴が重視される。透谷は民権運動の挫折者であったゆえにその眼差しを他界的世界に向けることになったが、民権運動退潮後の日本の状況は活気を失った社会として透谷に眺められたために、他界との交歓が個人にとどまらない集合的な次元で生命を活性化する機縁として位置づけられるのである。山路愛山との論争においても、決して透谷は現実世界を逃れて他界に遊ぼうとする立場を表明したのではなく、他界への架橋こそが現実世界を再生させるという主張をおこなおうとしたのであり、その点では透谷の立場は現実志向にほかならない。

透谷の生きた明治 20 年代の社会状況との交渉に重きを置いた第一部を受け、第二部では透谷の表現活動の基底をなすとみられるキリスト教、陽明学といった思想・宗教的文脈、あるいは江戸時代の文化・文学への評価、さらには詩劇『蓬萊曲』にみられる琵琶や、あるいは琴、三味線といった楽器にはらまれた象徴性といった、東西の文化的文脈からの透谷の世界への把握が試みられている。透谷の思想がキリスト教と深い関わりをもっていることはよく知られているが、透谷はやがてキリスト教を離れることになる。その契機として陳氏が重んじるものは陽明学の影響で、とくにその「知行一致」の考え方に感化されることで、キリスト教における悔悛が「行」のみあって「知」を欠いた行為であると認識するに至り、棄教へと導かれる要因となったとされる。一方儒教全般に対して透谷は「不生命」の教義として批判的であったが、それは裏返せば陽明学について透谷が惹かれた「知行一致」が内部生命を喚起する思想として捉えられていたことを物語っている。

江戸文化については、透谷は「粹」的な好色の世界への嫌悪からそれに対して否定的な評価を与えていたというのが常識である。陳氏はそれを踏まえつつ、「侠」という江戸的な価値観を「至粹」の精神の発現として透谷が肯定していたことに着目し、そこに透谷自身関わった自由民権運動につながる、民衆の生命の発露を捉えようとしている。この「至粹」的な精神を透谷は芭蕉や馬琴の作品にも認めており、透谷が江戸文学に肯定的な眼も向けていたことが指摘されている。

第二部で重視されている東洋的なものとの関わりの考察は透谷の代表作である『蓬萊曲』における「蓬萊山」に対しても向けられ、富士山と重ねられがちであったこの架空の山が『列子』や『長恨歌』などの中国古典を踏まえつつ構築されており、透谷独特の他界のイメージを現出させているという。またこの作品に現れる琵琶という楽器は、もともと琴として構想されていたが、琴には高い精神性や道徳性、自然との一体化といった含意があり、陶淵明の「無弦琴」のイメージの影響も想定される。それが琵琶に変更されたのは、琵琶の形象に託された女性性や、平曲のような語りに伴う楽器であることからくる「声を発す

る」という側面が重視されたと考えられる。この琴の上昇性と琵琶の下降性が融合する形で『蓬莱曲』の琵琶の登場に至っていることが推察されている。

○論文の評価

以上のような内容から成る本論文において評価される点としては、自由民権運動の挫折者からロマン主義的な詩人、評論家へと転じていったと見られがちな透谷の思想と表現を、広く東洋の文化的、思想的地平に置き直すことによって、その営為の普遍性を評価し直していることがまず挙げられる。また作品の数が少ないわりに膨大に積み重ねられている透谷に関する先行研究を丁寧に読み解き、自身の立場をしっかりと打ち出しているのは、論文執筆の基本ではあるとはいえ、やはり評価に値する姿勢であるといえる。また内容の紹介でも触れたように、透谷が否定的であったとされる江戸時代の文芸に対しても、必ずしも透谷は峻拒していたのではなく、民族精神の一形態としての「侠」を評価していたことの指摘などは、透谷研究における新しい側面として評価しえる。総じて本論文では、中国古典や江戸文化などからも養分を汲み上げ、自身の言論活動に取り込もうとしていた、柔軟で幅広い眼差しを持つ文学者として透谷を捉えようとする姿勢が明確である。それ自体が陳氏の読解の柔軟さの産物であるとともに、透谷研究に一石を投じるだけの価値をもつものといえるだろう。

一方審査委員のそれぞれの立場から、不十分であると見られる点も様々に指摘された。たとえば透谷をロマン主義者ではなく厭世家であるとする把握は、ドイツロマン派やその影響を受けた保田與重郎、三島由紀夫らがその両面を持っていたことを考慮すると、さほどの径庭はないのではないかという声が複数の委員からあげられた。また東洋文化の地平に透谷を置き直そうとする姿勢は評価されるものの、陽明学に対する理解が十分ではなく、一般論的な次元で透谷と結びつけられている面がある。さらにその陽明学に対置されているキリスト教への理解もやや概念的な段階にとどまっており、クエーカー教ないしフレンド派と透谷の関わりを深化すべきであったという指摘が出された。

これらの指摘、批判に対して陳氏は誠実に応答し、上記の点についても今後の課題として取り組んでいく旨が示された。全体としては質の高い日本語で書かれ、思考の深さをうかがわせる論文であり、最終試験での応答を踏まえた上で、審査委員会は全会一致で、陳氏の提出論文を博士の学位にふさわしいものとして判断した。